

六花

2009

平成21年

俳句雑誌 りつか
chairman Yamada Rokko
secondary c, and the
editor in chief Kotori
cover designed by little bird

5月号

たん
丹

新 緑

山田六甲

て 手探りに石裏の鮎掴みけり
ん うんと食べよと解きくるる粽かな
さ 逆立ちのおへそも逆さなる端午
い 石橋に戻りはあらじ菖蒲の芽
は 春惜しむ沖に白波立つるにも
し 新緑の音みな濡れてをりにけり
ば ばい貝のにぎりに春を惜しみけり
し 新緑の光の中の鴉かな
ば 散鮎の木の子山椒を叩きけり
ど どんたくの果てし博多に屋台の灯

り 流水に枝弾かるる花はな卯う木ぎ
よ 夜の新樹しんじゆ灯をやはらかに迎へけり
く くるぶしを過ぎゆく刻や春の水
か 肩で風鳶とびの煽あふれる若葉わかば冷ひえ
を をしどりの番つがいに添そへる春の鴨かも
か 茅葺かやぶきの屋根に花びらとどまらず
な 夏立つや白波に風洗はれて
し 白波の生まれては能登のと若葉冷
ま まくなぎに押され吊橋渡り切る
せ 千尋せんじんの谷へ白山雪はくさんゆき解げかな

新 樹 光

て 蹄鉄の踏み潰しゆく花の屑
ん の形に身を反らせたる薄暑かな
さ 錆び付きし門を覗かば薔薇一輪
い 息詰めて金魚を掬ひをりゐたる
は 花屑にまみれて遊ぶ仔猫かな
し シーツへと熱を逃がせる五月かな
ば 晩酌やつきあはせるは著義の花
し 新樹光ものの姿を奪ひけり
ば 番頭に心付けなる一夜酒
ど 土手埋める黄の草花に新樹光

り 料りょうる氣をたかぶらせつつ芹せり摘める
よ 夜もすがら雨を鳴らせる若葉かな
く 薫くん風ふうやあかんぼの髪透きとほる
か 風かぜ薫かおるだるく臥ふしをる褥しとねにも
を をのこにも手伝はせ蒸むす柏かしわ餅もち
か 家紋入れ高々と揚ぐ初はつ幟のぼり
な 泣きわめく児に抱かせる湯の菖蒲しやうぶ
し 新緑しんりよくに日差しの遊びをりにけり
ま 枕へと息の籠れる若葉わか冷びえ

初稽古面打つてより引き締まる

松本文一郎

鱧^{たら}ちりの鍋を囲まば家族なり

冬^{とう}麗^{れい}や大道芸の手^て風^{ふう}琴^{きん}

茜^{あかね}雲^{くも}睦^む月^{つき}の空に動かざり

初夢の蛇に吞まれてしまひけり

はつげいこめんうってよりひきしまる

面を打った瞬間、道場の空気が初稽古らしくピンと引き締まった。指導者の叱責の声や、一礼をしてから引き締まった、等が「初稽古」では多く詠まれるが、掲句は乱取りの技の中から初稽古らしい緊張感が生じたと詠んだ。そこが発見。面を入れる声、足の踏み込みの音、竹刀の鈍い音が相俟って正月気分をも打ち破り、道場に、生徒に、気合いが入ったのだ。「初稽古」の句にも同様の発見がある。

雪 卿 集

初^{はつ}
鏡^{かがみ}

貝
森
光
洋

とつておきの顔して覗^{のぞ}く初鏡
啓^{けい}蟄^{ちつ}のカレーライスの隠^{ひそ}し味
父^{ちち}の墓^{はか}少し傾^{かた}け地^じ虫^{むし}出^いはず
還^{かへ}暦^{れき}の視^し界^{かい}に古^こ稀^きや鳥^{とり}歸^{かへ}る
その上^{うへ}は昼^{ひる}の月^{つき}のみ鳥^{とり}交^まる

夜^よ
舟^{ふね}

梶
浦
玲
良
子

蠅^は螂^{らう}の枯^かれゆく風^{かぜ}の国^{くに}ざかひ
短^{たん}日^{じつ}の追^おひかけて来^きる非^ひ常^{じょう}口^{くち}
詳^{しょう}細^{さい}は面^{めん}談^{だん}の上^{うへ}ほとけの座^ざ
河^か口^{くち}まで続^{つづ}く枯^か野^のや夜^よ舟^{ふね}の灯^ひ
ふる里^{さと}も遂^{つい}に他^た国^{こく}か冬^{ふゆ}遍^{へん}路^ろ

せつじゆしゆう
雪樹集

波

波 打ちて 銀河の如し 芒原すすきはら

久永つう

窓たゝく風の冬めきぬたりけり
目覚めては布団引き上ぐ寒夜かんやかな
尖りたる波打ち寄する冬の海とが
古びたる門にしつかと霜しも柱ばしら

霞かすみ

筒井八重子

日の入れる時ぞ霞の町照らす
豆撒くや心に祈る事多く
一輪の水仙に部屋和なごみけり
山菜さんしゆゆ奠のほんのりと樹を包み咲く
屋根の霜雪と見みまご紛ごう朝あしたかな

蛍雪譚 六甲

囀りや一天青き水の上

五ヶ瀬川流一

囀りの盛んなさまと水に映る天の蒼さが春爛漫を思わせるというのだ。一天四海という格調的な言葉が当てはまるように表現し、鳥たちが大空を称えて鳴いているように思わせる。

抱かるる思ひに抱く大冬木

平居 濤子

冬の大きな樹を抱いてみると逆に抱かれているように思う気持ちの方が勝ってくるという。それは大木の持つ温かみによるものである。逆説的な表現が効果的。

櫓より火を投ぐ鬼や追儺式

藤原 春子

追儺式の鬼が観衆に向かって火を投げるのであるから、実に危険な行為である。にも関わらず観衆はその火の粉を浴びることが厄払いであると考え、火を投げられてもおそれるどころか喜ぶのである。伝統的な形の追儺式であることが分かり、又その場面を動きのある表現で活写した。

水玉を弾きて走る雪解水

廣瀬 佳織

水玉も雪解水も、同じ水でありながら、ぶつかり合う一瞬、水と水は相容れない現象をみせる。その瞬間を高速度カメラで撮影したように抜き出した。自然へ向けた写生眼のよさ。

半眼を沈める河馬や北風

黒田 令子

河馬の目が半分沈んでいると言って、北おろしの寒さを一層感じさせた。冬場は外気に触れているよりも、水中の方が暖かく感じることもある。その反面中途半端な沈み方であればよけいに寒さを感じるのである。寓意的でもある。

六花集

六甲選

五ヶ瀬川流一

川陰や我が背丈なる枯尾花

水仙の直き水盤静かなる

梅花藻をもてなほ白き雪解川

春水を二筋に分け岩襖

嘯りや一天青き水の上

平居滯子

白梅と紅梅枝を差し交す

山椿固きつぼみに透ける紅

抱かるる思ひに抱く大冬木

風花や電車過ぐ間に人消えて

あふれし愛受け止めくれし針納む